

はじめに

2週間にわたるニューヨーク医療研修に参加し、英語での医療コミュニケーション、実践的な臨床技術、そして日米の医療システムの違いについて深く学ぶ機会を得た。本研修では、単なる知識の習得にとどまらず、国際的な医療現場で必要とされる実践的なスキルと異文化理解を身につけることができた。

英語医療コミュニケーションの基礎構築

研修の前半3日間は、PACE大学において英語での医療面接技術の基礎を学んだ。Tony先生による丁寧な指導のもとで学習を進めることができた。特に印象的だったのは、単なる語学力向上ではなく、「相手に伝える」ことの重要性を学んだ点である。

ブロードウェイ俳優として活動される由水先生の授業では、日本人にありがちな控えめな態度がアメリカの医療現場では適切ではないことを実感した。患者との信頼関係構築において、明確で積極的なコミュニケーションが不可欠であることを理解し、表現力の向上に努めた。また、日本の小中学校でALTとして活動している方々との交流会では、実際にニューヨークで生活する人々との会話を通じて、学習への大きなモチベーションを得ることができた。

国際標準の救急蘇生技術習得

Phelps病院研修センターでの2日間のACLS講習では、英語による専門的な医療研修を初めて体験した。事前学習の効果もあり、英語での講義内容を理解できたことは大きな自信となった。骨髄穿刺練習キットや押し込み式の薬剤投与システムなど、日本とは異なる環境が興味深かった。

実践的なシミュレーション訓練では、座学で学んだ知識を実際の場面で応用する難しさと重要性を実感した。最終的に全員が筆記・実技試験に合格し、国際標準の救急蘇生技術を身につけることができた。現地研修医との交流では、専門知識を超えた人間的なつながりの大切さも学んだ。

模擬患者との実践的医療面接

研修中盤の3日間は、プロの模擬患者を相手とした医療面接実践に取り組んだ。この経験で最も重要な学びは、「共感を示すこと」の意義である。アメリカの医療教育において、患者の辛さを理解し、それを積極的に伝えることがいかに重視されているかを痛感した。日を追うごとに症例の複雑さが増す中で、心理的余裕を持ちながら臨床推論を進める技術が向上した。模擬患者からの即座のフィードバックにより、発音や姿勢といった非言語的コミュニケーションの重要性も認識できた。相手の目を見て能動的に共感を伝える姿勢は、言語の壁を越えた医療コミュニケーションの本質だと理解した。

実地研修で見た日米医療システムの差異

Mount Sinai 病院での小児外科シャドーイングでは、日米の医療システムの顕著な違いを目の当たりにした。最も印象的だったのは、ナースプラクティショナーによる病棟管理システムである。看護師の高度な専門性により医師の業務負担が軽減され、より効率的な医療提供が実現されていた。また、院内 iPhone を活用した Zoom カンファレンスシステムは、処置と会議を同時進行できる画期的な取り組みだった。このようなデジタル技術の積極的活用は、日本の医療現場でも大いに参考になる。手術手技や使用機器の違いも含め、医療の国際的多様性を実感することができた。

産婦人科専門クリニックでの研修では、さらに進んだ医療 DX の実例を見学した。AI によるエコー画像の自動解析システム、電話による検査結果説明、オンライン処方システムなど、効率性を重視した診療形態は、未来の医療の姿を示すものだった。技師と医師の明確な役割分担による専門特化も、医療の質と効率性を両立させる有効な手法だと理解した。

基礎研究環境への洞察

Mount Sinai 医科大学森下教授の研究室訪問では、国際的な基礎研究環境の実情を知ることができた。研究費獲得の戦略、共同研究のあり方など、日本ではあまり触れる機会のない実践的な話を伺えた。実験台に隣接する研究生デスクやすぐ隣のフロアにある動物実験室など、限られた空間での効率的な研究環境設計は、資源の有効活用という観点で非常に参考になった。

博士課程学生の川竹先生による等身大の留学体験談は、将来の進路選択において貴重な示唆を与えてくれた。博士課程からの海外留学という具体的なキャリアパスを知ることによって、国際的な研究活動への道筋がより明確になった。

文化体験を通じた総合的学習

研修期間中の文化体験も、医学的学習と同様に重要な意味を持った。自然史博物館やブロードウェイでのアラジン鑑賞は、アメリカ文化への理解を深めるだけでなく、自身の英語リスニング能力の課題も明確にした。ヤンキースタジアムでの野球観戦では、現地の人々との自然な交流を体験し、言語を越えたコミュニケーションの楽しさを知ることができた。

今後への影響と展望

この2週間の研修は、医学的知識や技術の向上にとどまらず、国際的な医療従事者としての視野を大きく広げる体験となった。英語での医療コミュニケーション能力の

向上はもちろん、異なる医療システムの理解、文化的多様性への適応力など、グローバル化が進む医療現場で求められる総合的な能力を身につけることができた。

特に、患者への共感を積極的に示すアメリカ式の医療コミュニケーションは、今後の臨床実践に大きな影響を与えるだろう。また、デジタル技術を活用した効率的な医療提供システムは、日本の医療現場改善のためのヒントとして活用したい。

研修で得た知識と経験を基盤として、国際的な医療従事者としてのさらなる成長を目指すとともに、将来的な海外での学習や研究活動への道筋も明確にすることができた。この貴重な機会を提供いただいた関係者の皆様への感謝とともに、今後の研鑽により一層の努力を重ねていく決意を新たにしている。